ナイスの視線で、日常の楽しみをお届けする、西成発の地域情報誌 2025

Takefree!

なび

7月号
vol. 221

「7月2日はうどんの日」
写真：釜揚うどん一紀（南開1丁目6の10）

特集 おとなの社会科

第20講 歴史 ── 女工物語・第2章

おとなの社会科

第20講 歴史 ── 女工物語・第2章

昔、使った教科書をパラパラめくってみると、あの頃には気づけなかった面白さがみえてきた──そんな経験はないだろうか。学校の教科書は昔と同じではない。だから、大人になってからの学び直しも決してムダではないはず。学校に通ってた頃を思い出して、もう一度、目の前に広がる社会を学び直してみませんか。

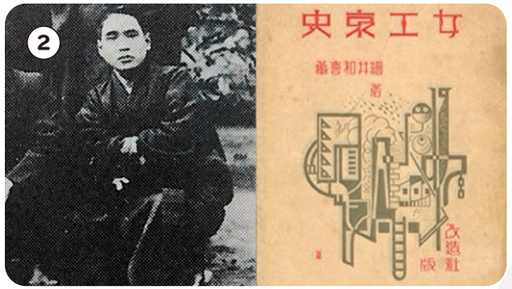
恩貴島橋から

今にも雨の降り出しそうな6月の午後、此花区の正蓮寺川に架かる恩貴島橋の上に立った(①)。阪神なんば線の伝法駅から歩いて10分ほどの距離である。かつてはこの橋のすぐ上流に明石島という細長い中洲があり、そこに浪華紡績の西成工場で働く女工たちの寄宿舎が置かれていた。

淀川の河口に位置する伝法は、かつて大阪の海の玄関だった。江戸時代には伝法船と呼ばれた俊足の輸送船が海運の主役となる。伝法船は上方の酒や醤油を伝法の港で積み、江戸の町に運んでいた。しかし、江戸時代中期に安治川が開削されて物流の主要ルートが移ると、伝法の賑わいは失われていく。

正蓮寺川も安治川と同じく江戸中期に整備された人工河川で、元々は淀川の支流である中津川の水はけ改善が目的だった。明治以降の伝法は、正蓮寺川の水運を利用し工業地帯として発展。渋沢栄一が設立した大阪紡績の成功で全国的な紡績ブームが起きると、この辺りにも多くの紡績工場が建てられた。1887(明治20)年に設立された浪華紡績もその一つである。

西成工場と名付けられたのは、ここがかつて西成郡伝法町だったことによる。西成郡は現在の大阪市西半分と、北部の淀川区・東淀川区まで含む広大な行政区分だった。1925(大正14)年に、大阪市は伝法町を含む44町村を一気に編入。「大大阪」の誕生とともに西成郡は消滅した。



26歳当時の細井和喜蔵と、1925(大正14)年に刊行された『女工哀史』の初版

細井和喜蔵の青春

女工の寄宿舎があった明石島を「奴隷の島」と名付けたのは、作家の細井和喜蔵である(②)。和喜蔵は紡績女工たちの過酷な労働の実態を記録した『女工哀史』の著者で、ここ伝法で10代後半の多感な日々を過ごした。

1897(明治30)年に京都府北部の加悦谷に生まれた和喜蔵が、たった一人で汽車に乗って故郷を飛び出したのは16歳の時。元号が明治から大正へと変わる1912年のことだった。行き先は紡績業の急激な成長で「東洋のマンチェスター」と呼ばれていた大阪である。

和喜蔵の初めての就職先は、浪華紡績と隣り合って建つ内外綿会社の西成工場だった。内外綿は1887(明治20)年に設立された綿花商社で、日露戦争後に紡績業にも進出する。近くには、1892(明治25)年に設立された伝法紡績の工場もあった。

大正時代に入ると、伝法周辺には重化学工業の大工場が集積する。当時の伝法は年間を通じて煤煙に覆われ、青空は正月にしか見えなかった。この街で和喜蔵は見習いの機械工として働き、仕事が終わると福島区にある職工学校の夜学に通った。

和喜蔵は毎日の行き帰りに恩貴島橋を渡り、「奴隷の島」を間近に見ていた。浪華紡績の工場と寄宿舎は駅の陸橋のような橋で結ばれ、女工の逃亡を防ぐ構造になっていた。彼女たちは外出も厳しく制限され、実質的な軟禁状態だったという。「搾取の城を築くに、何とした要害の地であろう」と和喜蔵は『女工哀史』に記している。

ある日、和喜蔵は仕事中の事故で左手の小指の上半分を失う。しかし会社からは何の補償もなく、その後ずっと指に障害を抱えて生

恩貴島橋から正蓮寺川の上流側を望む。明石島は造船所や鉄工所も建つ大きな中洲だったが、陸地化され完全に姿を消していた

きることになる。当時の紡績工場では、機械に巻き込まれて身体の一部を失ったり、命を落とすことも珍しくなかった。

伝法に来て3年後、和喜蔵は恋愛沙汰などを理由に西成工場を解雇される。他社の経験工と偽って兵庫県の内外綿西宮工場に再就職するが、精神が衰弱し自殺未遂も経験した。この頃の日本は第一次世界大戦がもたらした空前の好景気に沸いていたが、若い和喜蔵は地を這うような目線で世界を見ていた。

デモクラシーの時代

伝法駅の隣、阪神なんば線の千鳥橋駅を中心に広がる街が、此花区の四貫島（しかんじま）である。江戸時代初期の新田開発で誕生し、明治以降は伝法と同じく正蓮寺川の水運により紡績の街として発展した。

1890年（明治23）年に金巾製織（かなさらせいしょく）という紡績会社がこの地に工場を造り、後の合併で東洋紡績四貫島工場となる。1918（大正7）年、西宮で1年半を過ごした和喜蔵は大阪に戻り、この四貫島工場に入社した。和喜蔵はこの頃から文学の道を志すとともに、友愛会という労働組合の全国組織に参加する。

明治後期になると、資本主義化が進んで工場労働者が激増。各企業で賃上げや労働時間の短縮を掲げた労働運動が激化する。東洋紡績四貫島工場でも、大正時代に2度の大規模な労働争議が発生した。この頃にはロシア革命の影響を受けた社会主義運動や、普通選挙運動などの様々な大衆運動が活発になった。こうした当時の社会状況は「大正デモクラシー」と呼ばれる。

この頃、紡績業で特に問題視されていたのが女工の深夜業である。当時は10歳以下の女児までが夜を徹して長時間労働に従事する状態だった。政府は労働者を保護するために、1911（明治44）年の帝国議会で工場法を制定。しかし資本家たちの猛反対に遭い、深夜業の全面廃止は1929（昭和4）年まで引き延ばされた。

千鳥橋駅前の商店街。左が四貫島商店街本通り、右は四貫島中央通り商店街

労働者の集住地域だった四貫島には労働運動の地下組織が多く存在し、いくつかのプロレタリア小説の舞台にもなった。こうした環境で、和喜蔵も女工の待遇改善や社会主義の実現を目指して労働運動に没頭する。しかし、会社からは危険分子として解雇され、再び失職してしまう。

四貫島・千鳥橋の最盛期は大正後期から昭和初期で、街は紡績女工たちの熱気で溢れかえっていたという。しかし、1937（昭和12）年に日中戦争が始まると、戦時統制で日本経済は悪化。紡績業も縮小の一途を辿る。

千鳥橋駅の周辺にはいくつもの商店街が縦横に伸び、かつて紡績の街として賑わっていた頃の名残が感じられる（③）。夕暮れの街を買い物客に混じって歩くと、雑踏の中に和喜蔵や女工たちの足音と息遣いが聞こえた気がした。

見えない川を渡る

時刻は既に夜の12時を回り、街は闇の底に沈んでいる。前方に正蓮寺川の高い堤防が立ち塞がる真っ暗な路地で、背後に誰かの気配を感じて立ち止まった。数秒おいて振り返ったが、どこにも人影はなかった。湿った不快な風が吹き抜け、背中に冷や汗が流れる。「地霊」という言葉が頭をかすめた。

息を潜めて鉄の階段を上ると、堤防沿いの道に出た。正蓮寺川は戦後の高度成長期に水質が著しく悪化、さらに高潮による浸水被害も重なり、地域住民が大阪府に埋め立てを陳情。工事によって川は地下に移されて暗渠（あんきょ）となり、隣に阪神高速の正蓮寺川トンネルが開通した。元の河川敷は陸地化されて正蓮寺川公園として整備が進み、現在は橋と両岸の堤防だけが残っている。

伝法団地。かつては浪華紡績と寄宿舎とを結ぶ陸橋がこちら側に伸びていた

恩貴島橋を渡って北へ向かうと、ほどなく行く手に巨大な伝法団地が現れた。ここが浪華紡績西成工場の跡地である（④）。1891（明治24）年10月28日早朝、岐阜県南部を震源とする濃尾（のうび）地震が発生。震源に近い岐阜県と愛知県で7千人以上の死者を出した。大阪でも震度6を観測し24人が死亡したが、このうち22人が浪華紡績西成工場の職工・女工だった。

当時の西成工場は新築間もない煉瓦造りの近代建築だったが、耐震性に問題があり倒壊。深夜業を終えたばかりの女工たちに無数の瓦礫が降り注いだ。伝法団地の隣には正蓮寺川の名前の由来となった海照山正蓮寺（かいしょうさんしょうれんじ）があり、境内に犠牲者を祀った慰霊碑が立っている（⑤）。

伝法団地から東へ歩き、正蓮寺川公園に足を踏み入れた。地元の若者が数人、ベンチに集まって何事かを話している。もう少し行けば東洋紡績四貫島工場の跡地だが、現在は中高一貫校の敷地になっていて工場は跡形もない。

その四貫島工場を解雇されて間もない1920（大正9）年の冬、22歳になった和喜蔵は寒風吹く大阪駅のホームに立ち、東京行きの汽車を待っていた。関西では熱心な活動家として知られていて再就職が難しく、過去を葬って遠く離れた街に行く必要があった。

農村から都市へ、工場から工場へ、そして街から街へ。故郷の加悦谷を離れてからの和喜蔵の人生は、さながら流れ者のようである。多くの女工たちと同じく、和喜蔵も資本主義化の波に呑み込まれた、彷徨える旅人の一人であった。

正蓮寺の無縁仏群。上段左の石碑が、震災死した職工・女工を祀った慰霊碑

今夜、「奴隷の島」は聖域のようにフェンスで囲われている。遠くの鉄橋を、阪神なんば線の尼崎行き最終電車が渡っていく。水のない夜の河原に、走り去る音だけが寂しく響いた。

文責：福井龍磨

にしなりもん

食いだおれの街・大阪ミナミのさらに南の街・西成。
まだまだ発掘されていない「にしなりもん」を味わい尽くします。

笑いが集う酒場「楽笑酒場」

「金」「密」「暑」「震」これらの漢字に共通するものはなんでしょう？

答えは本文の最後の方にあるので一度考えてほしい。

さて、今回訪れたのは「楽笑酒場」さん。国道43号線沿い、ニトリの向かいにあるお店だ。店主は元芸人さんで、西成区で生まれ、小・中・高校も全て西成区内という生粋の地元民だ。暖簾をくぐり店内へ入ると4人掛けのテーブル席3つとカウンター席が5つほど。お伺いした際は筆者が一番乗りだったが、そのあとすぐにテーブル席は埋まり、どこからも楽しそうな笑い声が聞こえるなんだかホッと寛げる居心地の良い空間だった。

席に着いて店主にお店のことや料理のことなどお聞きすると、軽快なやりとりでいろいろお話ししてくれる。お店は元々岸里にあったが、1年半ほど前に現在の場所に移ったという。お昼はランチ定食やお弁当もあり、基本は店主一人で切り盛りしているが、お昼はオカンがいる時もあるそうだ。

では、さっそく注文、店主おすすめの「赤海老の混浴ユッケ」「山芋のお好み焼き」「チキンカツ」を注文。店主とのお話に花を咲かせつつ、料理が到着。

看板やホームページにもドンと載っている「赤海老の混浴ユッケ」にまずかぶりつく。甘め醤油の自家製タレに漬かった海老がおいしい！ チキンカツやお好み焼きも次々と食べていくが、とにかくお酒が進む料理で、「楽笑酒場」という名だけに、舌も満足して口の中も楽しくなってくる。筆者は基本飲み屋ではビールばかり飲む。その後に注文した「生ハムマッシュポテト」「楽笑タコライス」もいただきながら、とにかく美味しいので、気づけば飲みすぎかなと思うくらいにビールが進んでいい気分であった。

途中トイレに行くと、トイレ内のちょうど目線の先に店主の学生時代の写真をラベルした酒瓶が置いてある。それを見て少し笑ってしまい（失礼！）いろいろなところに笑いのしかけがあるなと感心する。色々食べて飲んで、お腹も心も満腹、満足してごちそうさま！

さて、冒頭で読者に問うた漢字のクイズ、答えは「過去に『今年の漢字』1位に選ばれた漢字」だ。日本漢字能力検定協会が世相を表す漢字だが、どうしても大きな事件・事故・災害などを反映することが多いため、若干暗めの漢字が選ばれることが多い（阪神タイガースが18年ぶりにリーグ優勝した時は「虎」が選ばれたりもしたが）。

たしかに最近なんだか気分が滅入る話題が多いと感じる今日この頃。今回のように、楽しく笑いながら飲んで食べてができた「楽笑酒場」さんみたいに、この先の世の中が楽しくなってみんなが笑って過ごせる世の中になり、今年の漢字に「楽」「笑」のような心が温かくなる漢字が選ばれるといいななどと思いながら、店主に見送られてお店を後にする。

文責：笹川勝正

楽笑酒場
住　所：西成区中開1の2の12
営業時間：昼 お弁当・定食ランチ 11時～14時
夜 居酒屋 18時～23時
定 休 日：日曜日
Instagramアカウント：@rakusyousakaba

[沖田一志] クレジットカードの不正利用に遭遇。何気なく開いたスマホのアプリで来月の支払額が一桁多くて、金額を二度見した。カード会社に連絡して被害を伝えて、再発行を依頼しました。

[磯拓哉] やっと梅雨が明けたと思ったらもう夏ですね笑。夏はイベントが多いから割と好きです笑。ビールが美味しい季節ですね笑。

[住友宣夫] この時期は年々暑さが増し、この暑さが当たり前になりつつあり、水分補給など熱中症対策がより重要になってきてます。皆さんも気をつけてください。

[笹川勝正] 出張で久しぶりに新幹線「こだま」に乗りました。行きはキティちゃん、帰りはワンピースと偶然ラッピング列車に乗れて、ちょっとラッキーな気分になれました！

些事争論

些事でも何でも気になったらあれこれ考えてみよう。いいこと思いつくかもしれないし。気がついたら西成にたどり着いていた、或るオタクの再出発系コラム。

逃げていい

母が亡くなって二十年が経つ。

漁村の小さなお寺に嫁ぎ、気丈で働き者だった母は、悩みや愚痴をこぼせる人も場所もなく、父の傲慢さを語ることもないまま、我慢の人生を歩んだように思う。

私は幼いころから、母には逃げ場がないことに気づいていた。

遠くの実家に帰れるわけでもなく、ましてや、たくさんの子どもを抱えての家出は不可能だった。

そんな状況は、私の暮らす小さな漁村の女性たちも同じで、暴力に耐えかねて裸足でお寺に逃げてくる姿も見てきた。

幼い私は、母の我慢に苛立ち、不甲斐なさを感じ、気づけば父と同じように、怒りや情けなさを母にぶつけてしまっていた。

そんな両親の元から早く独立したいと、私は故郷を離れた。

その後、私自身も女性であることの不条理や生きづらさを感じるなかで、フェミニズムに出会い、救われた。

女性の苦しさは、個人の問題ではなく、この社会の構造的な苦しさなのだと知った。

今ならはっきり言える。

父の言葉が母を縛っていたことも、財布を握らせてもらえなかったことも、怒鳴り声が響く夜の空気も、それは精神的な暴力であり、経済的な暴力だった。

でも、当時の社会には「DV」という言葉も、配偶者暴力支援センターという仕組みもなかった。

警察に助けを求めるという選択肢も、周囲に相談するという道も、母にはなかった。

「我慢すること」「家族を壊さないこと」が、何よりも優先された時代だった。

母や多くの女性たちには、逃げ場がなかった。ただ、一人で泣くしかなかった。

私は、そんな母を、そしてあの頃、裸足で逃げてきた女性たちを忘れない。

一晩だけでも静かに心を休める場所があったなら。

誰にも邪魔されずに、本音を話せる相手がいたなら。

その思いは今も私の中にある。「制度」や「仕組み」からこぼれ落ちる人たちのために。

制度があっても、その窓口にたどり着けない人たちのために。

「逃げたいけれど、どこへ行けばいいかわからない」女性たちのために。

相談できる場所がほしい。プチ家出でもいい。ただ誰かに「つらかった」と言えるだけで、心が動き出す。

そんな小さな一歩を、安心して受けとめられる場所がほしかった。

私たちの民間シェルターには、制度ではすくいきれない「声なき声」が集まってくる。

家庭、恋人、職場、地域とさまざまな場所と関係で傷ついた女性たちが、ふっと肩の力を抜いて「ここに来てよかった」とポロっとつぶやくたびに、私は母の顔を思い出す。

2024年4月、「困難な問題を抱える女性への支援に関する法律」が施行された。

多くの女性たちの訴えが、社会を動かし、ようやく制度が現実に追いついてきた。

全国の民間シェルターが、全国の隣保館が、誰かの「再出発」の扉であるように。

「逃げていい」。そう思える新たな場所と関係をつくりつづける。

ハンプティ・T

[福井龍磨] ダイアー・ストレイツの『ブラザーズ・イン・アームス』40周年記念盤が出た。バンドメンバーへの新規インタビューや、未発表のライブ音源も収録。昔の名盤に再び光が当たるのは良いことだ。

[西田吉志] 7月に行われる参議院選挙。物価や生活費の高騰、消費税、医療費や年金制度、最低賃金や非正規雇用、未来の世代への投資、国外情勢、他にも色々と多岐にわたり過ぎてて考えるだけでしんどいし、切羽詰まった選挙。

melody of Smiles

お天気の良い日は園の屋上の園庭で遊ぶGCCKidsの子どもたち。砂場でのごっこ遊びや園庭での鬼ごっこを全力で楽しみます！ お部屋では英語のレッスンだけでなく、それぞれの年齢に合わせて季節の制作にも取り組みます。

GCC Kids International School

大阪市の住民参加型地域組織「地域活動協議会」の活動に橋を架けよう「近ツ橋【ちかつきょう】」

近ツ橋

青空ボッチャ

今年度の長橋地活協では、長橋3公園、長橋西公園、長橋公園の三つを拠点に、地域活動の活性化と地域交流の活性化を目的として「公園活性化事業」を実施している。まずは公園で色々なイベントをしてみようということで、今回は西成区でブームを巻き起こしているボッチャを長橋公園で実施した。

当日は地活協のメンバーと地域の子どもたち等、約20名が参加し、地活協チームと子どもチームで対戦を行った。

地活協チームは日々の練習の成果とお手本を子どもたちに見せるために、いつも以上にやる気に満ちていたが、ミラクルスローが頻繁に起きるのがボッチャである。8歳の子が投げたボールが白いボールにニアピン（白いボールに近い方の勝ち）となり、初戦は子どもチームが勝利を飾った。

その後はシーソーゲームとなり、接戦の末、地活協チームが勝利を収めた。高齢者と子どもたちが交流する良い機会となったので、今後はどのようなイベントをしようかお悩み中である。

唯一の心配は私の雨男くらいだろうか。

[谷口円] かわいいカプセルトイを発見し、全６種のうち２種がすごく欲しい…と思った結果、メルカリで購入。欲しいのが当たる確率を考えると単価は割高でもお得。悪い意味で大人になってしまった…。

[田岡秀朋]
万博は未来を見せてくれた。
年パスを購入した高齢者の多さから超高齢化を。
西成を元気にする外国人の多さから町国際化を。

葉っぱの吐見（といき）

私は草木が大好きです。とくに観葉植物には心癒されます。私と葉っぱとのお喋りを聞いてください。

頭についたのは蕾です。花が咲いたら報告します。

「小夏（ミニひまわり）の葉っぱ」の巻

どうすれば背がのびるかな？
ずーっと考えた。
空にむかってジャンプする？
ずーっと飛びはねた。
空にむかって背伸びする？
ずーっとつま先たてた。
空にむかって叫んじゃう？
ずーっと声だした。
ジャンプしてもチビのまま。
土をちらかしてごめんなさい。
つま先たててもチビのまま。
根っこがケガしてごめんなさい。
声をだしてもチビのまま。
葉っぱがしおれてごめんなさい。
あたまに何かついている。
チビのままでもついている。
夏はそこまでやってきた。
チビのままでもやってきた。

赤井まゆみ

皮算用 胸算用

にしなり隣保館の館長が日々の出来事について胸のうちで皮算用していることを語っていくよ。

先月、米の価格について書いたが、スーパーでは相変わらず国産米は高いままで、アメリカ産やその他の輸入米が店頭に並んでいる。また、政府は備蓄米を市場に放出したそうだが、執筆時点では限られた店舗のみである。我がままを言っている場合ではないが、これまでどおり普通に国産の米を食べたいと思うのは私だけではないだろう。

そもそも、急に米の値段が高くなった本当の原因は？ 複雑に絡まっているそれをわかりやすく解説してくれる報道はあまりないようだ。米価の急騰は、より広範な物価高というトレンドの一つにすぎない。農業政策全体、生産、物流、輸出入など大きな経済構造との関連で捉えるべきで、単に「米が2000円、3000円」といった問題ではない。生産量・輸入量のコントロールや備蓄米の慎重な運用、消費者・生産者の双方への適正な価格供給ができる政策が求められているのではないかと思う。

（寺本良弘）

いい湯かげん

目減り防止の年金改革

5月30日に年金制度改革関連法案が衆院で可決、参院に送付された。この法案のポイントは、「年金掛けたってちゃんと貰えるの？」という若い人たちにひとまずホッとしてもらえるかどうかだった。

年金の受給額はどのように決められているのか。その時の物価とか賃金にスライドするのではない。「マクロ経済スライド」という人口構成（少子化、高齢化）や平均寿命、経済成長率など社会全体の動きを基にして自動調整する仕組みになっている。この方式でいくと、2050年代に65歳を迎える世代は年金受給額が3割も減ってしまうという試算が出た。現在、厚生・国民年金両方とも同額で月に6・6万円が支給されるが、これが4・6万円に減ってしまうわけだ。

これは年金の危機だと立憲民主党が動いた。かって「ミスター年金」と言われた立憲民主党の長妻昭さんが「現役世代年金3割カット防止法案」と名づけた修正案を立憲が提出したのだ。争点になったのは、厚生年金の余剰金積立を一部基礎年金に移行させるということだった。厚生・国民年金共通の基礎年金の目減りを防ぐ措置で、野田代表は「パンにあんこを入れる」と説明した。当然、厚生年金者の積立分を国民年金者へも拡大するのは「流用」じゃないのかとの反発もあったが、国民年金加入者は3割弱だし、そもそも基礎年金の積立の半分は国庫から拠出されているから、「あんこ」は妥当だとボクは思った。

どうだろう？ 若い世代は、25年後も基礎年金が減ってしまう危機は回避されたとホッとしてくれただろうか。もちろん、物価スライド制になって物価上昇についていけるのかとか、国庫（税金）からの拠出がどんどん増えていって大丈夫なのかとの疑問は残っている。しかし、改革は一気にはいかない。少数与党の状況下で野党がリアルな修正案を可決させながら、国民の信頼を獲得していこうとする姿勢は歓迎すべきだ。ボクは、社会保障全部とは言わないが、年金問題についての立憲民主党の政策の積み上げや対案ある政府との議論力は立派だと思った。

ただ、国民の信頼という意味では、今回の年金改革議論は拙速だったし、政局がらみになったという点で疑問を残した。立憲以外の野党が言う通りだ。そこで、年金改革法案が手玉にとられて自公立の大連立構想が目論まれているとの批判が高まった。

さて、間もなく参院選挙。そもそも参院選は野党主導でなければならない。期待通りにいかなくても、年金や夫婦別姓、教育無償化、非正規雇用者の手取り引上げなど、少数与党という状況下で野党は健闘してきたと思う。しっかりした政策戦を仕掛けて、参院選らしい選挙にして欲しいと思う。

冨田一幸

人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これからも「いい湯かげん」のテーマ探しに出かけます。

[若松司]折口信夫は「死者の書」の自作解説で、日本人には夕日に対する宗教的感覚（日想観）がある、と言う。夕暮れを眺めているときに感じる浮遊感はそういうのに通じているのだろうか。

[山村裕太]先日マクドナルドで照り焼きバーガーセットを購入。自転車で持ち帰ったため、袋の中でメロンソーダが大暴れし、照り焼きとポテトが浸水。なぜか金を落とすよりショックでした。

〃祝100回〃

地域の縁を心でつなぐ

松向寺さんの心の時間

大切な息子を亡くし悲しみに暮れる母親に「息子はどこに行ったの？」と尋ねられ、「お葬式は仏さまに生まれる儀式なので、仏さまになりましたよ」と答えると、再び「本当に仏さまになれたの？」と問われました。若い頃に直面した同じような場面ではご遺族の一人に「死んだら無になる」と言い詰められ、言葉を返すことができませんでしたが、このたびは「残された人の心次第です」と答えました。

百年前の金子みすゞの詩には「忘れていても仏さま、いつもみていてくださるの。（中略）ありがと、仏さま」とあり、仏さまをそばに感じていた日常を偲ばせます。「仏さまを見つめる眼」が養われていない現代人には理解し難い「詩」かも知れません。それでも母親にはこの詩のように「心次第で息子と会える」と伝えます。

檀家で目の見えないNさんは「心で、耳で、指や手のひらで、音で」感じとり、「目が見えないからこそ、見えた世界がある」ことの感謝と喜びを話されます。きっと仏さまも見えているんだと思います。

松向寺　通法

写真は人生の一部が映ったもの。ここは思い出や自慢の1枚を少しど紹介するコーナーです。

ワタシの1枚

『心の時間　祝１００回』

連載100回を迎えられた松向寺さんにコメントをいただきました。――悩みの多くは「心」が解決するように思います。そこで「心の時間」は読者の「心」の栄養素になることを願って作ってきました。年を重ねると身体は衰えても「心」は成長します。もうしばらく「心の時間」でお会いしましょう。　（編集スタッフ 若松司）

smile ゆ～とあい
にしなり隣保館

にしなり隣保館「スマイル ゆ～とあい」は、地域コミュニティ全体が抱える課題の解決をめざす民設民営の福祉施設です。日々悩んでおられる困りごとはありませんか？お悩み解決のためにできることをいっしょに探しましょう。

なび 7月号（vol.221）
発行日：2025年 7月 1日（創刊日：2007年 1月 1日）
発行：株式会社ナイス
住所：大阪市西成区長橋 3-6-33
電話：06-6563-1150
E-mail:info@nice.ne.jp
url:https://www.nice.ne.jp/

編集長：西田吉志
編集：磯拓哉、沖田一志、笹川勝正、住友宣夫、田岡秀朋、福井龍磨、山村裕太、若松司（あいうえお順）
イラスト：hidarimaki、西井亜花梨
デザイン：谷口円

（株）ナイス
ホームページ